敬老乗車券

薄葉　茂　宮城

排水の穴より頭をつきだした夏の朝(あした)の雑草いつぽん
バス席を高齢者今日も埋めつくし坂の上からなだれて来たり
ＩＣをタッチ、残額八万円　敬老乗車券の威力にひるむ
農耕のにほひとぼしきファミリーが十勝でバターを作る〈なつぞら〉
老いてなほ草刈正雄　左手でフレンチのやうに和食をたべる

茄子の四つ子

遠藤豊子　埼玉

初穫りの茄子の四つ子がならびたりふつくりそつくりつやつやとして
手秤で茄子へ追肥す一握り二十グラムにねがひもまぜて
もうレモンのかたちしてをり一センチ二センチほどの緑のレモン
黄みどりの十ミリほどのカマキリが朝露おける草を這ひゆく
大伯母のわが目にまぶし三姉妹若木さながら十代をあり

尻をゆすりて

長尾和守　千葉

宮崎の辣韮をサウジの山塩で漬けたるは旨しご飯がすすむ
後肢(うしろあし)よわりし犬がみぎひだり尻をゆすりて朝の路地行く
息あらくわが門よぎる老犬にけさは駆け寄り首を抱きやる
わが窓を開くやはたと夜のさやぎやめたるごとく森の木々あり
水無月の西日暑ければわが影に小犬容れつつ畑道あるく

蒲生野

四野宮　和之　東京

かの皇子が遊猟さなか袖振りし蒲生野ゆけり雨後のはつ夏
側溝のバイカモ見つつバス待ちぬ湖（うみ）の西なる〈生水（しやうづ）の郷〉で
自治会のけふの清掃延期との知らせ貼りたり雨つよき朝
三人の論客をりてそをずつと聞けり老人会の二時間
ゆび置けば６０と表示したるこの血管年齢測定器良し

運ばれる

中村敬子　東京

運ばれる担架のうへで不埒にも締め切り近い歌考へる
さつきまで自分の足で立つてゐて土嚢のやうに今運ばれる
青年であらうか救急隊員のおだやかで強き声のみ聞こゆ
あるやうでないもの数多　点滴のしづくしづくの音なく落ちる
線路側の病室なれば駅前にありし実家のごとく眠れり

友の輪

山下佐保　新潟

田の水が家々をみな映し込み地底に町ある逢魔が時よ
家ごとの薔薇の香りを楽しめる夜は薔薇との秘密の時間
絹さやの筋取り跡の荒々し父が育てて茹でたる野菜
煙草吸ふ友と吸はざるわれとゐて二人の間にはさまる何か
車から降りる背中を見送れば子は友の輪に入りて笑ふ

麦熟れて

漆崎健一郎　福井

山の端の雲を焼きゐし陽の没れば熟れ麦の面忽ち暗む
転作の田の麦熟れて立つる香を野に足停めて息深く吸ふ
巣を持てる雲雀にあらむ麦刈りし跡燃す煙（けむ）に近づきて鳴く
ふつくらと若葉が包む前山が根付ける田の面に潤みて映る
朝なさな掃けど切りなく八つ房の梅の実落ちつぐ自然淘汰に

えびせん

河合育子　愛知

鳶は飛ぶ宇宙へ吸はれながらとぶ浜木綿のうへの半球の空
とりどりの柄なる浅蜊翳すとき灯台からのしろき風吹く
潮干狩り帰りの大きえびせんべい齧る速さで夕日が沈む
跳ね出づるままそのままの海老の眸（まみ）うつくしかなしえびせん食めば
大判のえびせんべいの海老のひげひそひそよぐ今宵大潮

六月の満月

米田郁夫　奈良

はらからは巣立ちゆきたり巣の縁に飛び立てぬまま子つばめ一羽
巣立ちたる子つばめ五羽は軒先に体寄せ合ひおとうと待つよ
二人とも癌になりしよ　かたつむり応ふゆつくりゆつくり生きよ
早苗田に夕明かりして蛙鳴くこの喧噪は命のあかし
六月の満月まるくまろやかだ膀胱癌の術後のオレに

荒南風

竹内　みどり　鳥取

薄黄色の栗のはなふさ巻き上ぐる風にシャマンのごとく立ちたり
呪術的突風生みたる荒南風（あらはえ）に道の端へと押しやられたり
人間と人型ロボット（アンドロイド）が泣くときにどちらの涙をぬぐひてやらむ
思ひ出し笑ひをしつつ道をゆく女性のショート・パンツの白さ
たくひれの鷺が水田をあゆみをり腹を満たせぬ夜九時の闇

砂時計

小沢　まき＊　広島

いち日はひと世たとえばこの昼に残年思えとサイレンが鳴る
砂時計　天地を反転させるたび消える砂つぶ時間つぶあれ
ひるがえり二羽の燕が縫うけれど雲は解ける　窓枠のなか
仄明かりする水面かも読み終えてソファーへ置いた岩波文庫
李剝きつつ思うイワン・イリッチの死ぬ前の声「ゆるめてくれ」を

涙が出ないよ

浅野　千里　香川

みづからが死んだのを知らぬ友ならんケータイ取る間もなく倒れゐて
夢を見てゐるやうな友の死顔のせゐなのかわたし涙が出ないよ
人の美点を見出すがうまき男友達ゐなくなりたり風待月の夜
「読んでみ」と渡されし本返すべき友亡くなりてちゆうぶらりんの本
人ひとり減りたる町に降り出だす雨が夏日の埃をしづむ